

I 研究主題

「内面の育ちに視点をあてた授業作り」 (※副題は 各学部で設定)

II 主題設定について

昨年度「豊かな心を育む教育」について各学部で研究を進めてきた。小学部は個別の課題学習を通して、教材の工夫や教師の言葉かけを学び、よりよい指導や児童の表現する力の基礎を作ることができた。中学部と高等部は道徳科の授業を通して、生徒が道徳的価値を学ぶとともに、実践へ繋げていくことや教師の意識を高めることができた。研究を通して、教師の知識を高めるとともに、教師間での話し合いを重ね、共通理解を行い、深めていくことが大切であるという意見が上がった。また、実態に応じた内容、指導方法の工夫により、生徒にみられた主体的な学びを今後どのように繋げていくことができるか、授業の中で事例対象児童生徒の変容を様々な視点から認めることで、今まで気づかなかった良さや個々の成長を確認し合ったことを学習以外の場で般化させていくことが大切であり、課題としてあがった。

今回の学習指導要領改訂では、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図っていくことが規定された。授業等において「振り返り」や「言語化・対話」を重視した取組、またその取組を通じた児童生徒本人による「気づき」、「学び」に対する「意味付け」や「価値付け」等が「深い学び」につながると言える。そして、その学びを一人一人が積み重ね、関連づけていくことが大切である。そのためにも教師は、児童生徒の学びの過程（プロセス）をしっかりと読み取り、教師が児童生徒の様子、変容を「意味付け」「価値付け」することが重要であると考え。児童生徒の学びとは、例えば、挙手をする、発表をする、自分の考えを伝える、感想に書くといった目に見える、行動に表れるものだけでなく、注意を向ける、時間いっぱい活動する、課題に取り組む姿勢といった態度、新しいことにチャレンジするときの「できるかな」「やってみよう」という思いや気持ちの変化も学びの一つとしてとらえる。また、肯定的な場合だけでなく、学習した知識や技能は身に付いてきているが、不安や苦しさ、恥ずかしさなどから行動へ移せずにいる背景、葛藤や迷いといった思いも含めて学びと考える。表面に表れない学びも含めたものを「内面の育ち」として捉え、教師は適確に読み取り、そして、児童生徒が個々の今もっている力を十分に発揮できるような学習目標、評価の設定や実態把握、授業を進めていく力を教師が身に付けていく必要がある。

そこで今回の研究では昨年度の研究を生かし、教師の知識を高めるとともに話し合う場を設け、生徒の変容を様々な視点から捉えていくという「内面の育ち」に視点をあてて取り組みたいと考えた。1年目は教師が内面の育ちをどうやって読み取るかを学び、2年目の実践へと繋げていきたいと考える。教師は児童生徒が抱える内面の課題を明らかにし、複数の目で多様な側面から学びを捉え、内面の育ちを読み取る力をつけることで、子どもたちの確かな成長へと繋げていけるようにしたいと考える。

Ⅲ 研究の目的

- 児童生徒の「内面の育ち」についての知見を高める。
- 児童生徒の実態把握、目標設定、読み取り方、評価との関連を整理し、内面の育ちに視点をあてた授業作りを行い、変容を追うことで、有効性を検証する。

Ⅳ 研究の期間 平成 30 年度から平成 31 年度の 2 年間とする。

Ⅴ 研究の進め方

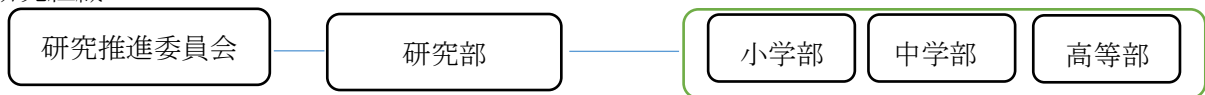
< 1 年次 > 基礎研究

- ・内面の読み取り方、内面の育ちについての共通理解
- ・実際の授業の中でどのように目標を設定し、評価できるかを洗い出す。
- ・講師を招聘し、内面の育ちについての研修を行う。

< 2 年目 > 実践研究

- ・内面の育ちに視点をあてた授業作り
- ・内面の育ちについて実態把握、目標設定、読み取り方、評価との関連を整理し、実践する。児童生徒の変容を追うとともに有効性を検証する。

Ⅵ 研究組織



研究推進委員会…校長、教頭、事務長、教務主任、研究主任、研究部、学部主事、
道徳主任、生徒指導主事

Ⅶ 年間計画

- ・毎週火曜を「研究の日」として設定し、全体または各学部で話し合いを進めていく。
- ・研修係からの協力を受け、係会を行い、進捗状況の報告や方向性について話し合う。

一学期	研究主題・取組・内容決定（研究係） 研究推進委員会 全体研究会① 校内授業実践① 研究協議 全体研究会② 他教科・領域、日常生活全般も含めた変容について情報共有
夏期休業中	8月7日（火） 全体研修「子どもの内面を育むための授業づくり」 講師 国立大学法人 山梨大学 教授 廣瀬 信雄
二学期	授業実践 校内授業実践②
三学期	全体研究会③（各部内での授業実践を報告） 研究のまとめ作成 来年度に向けて検討